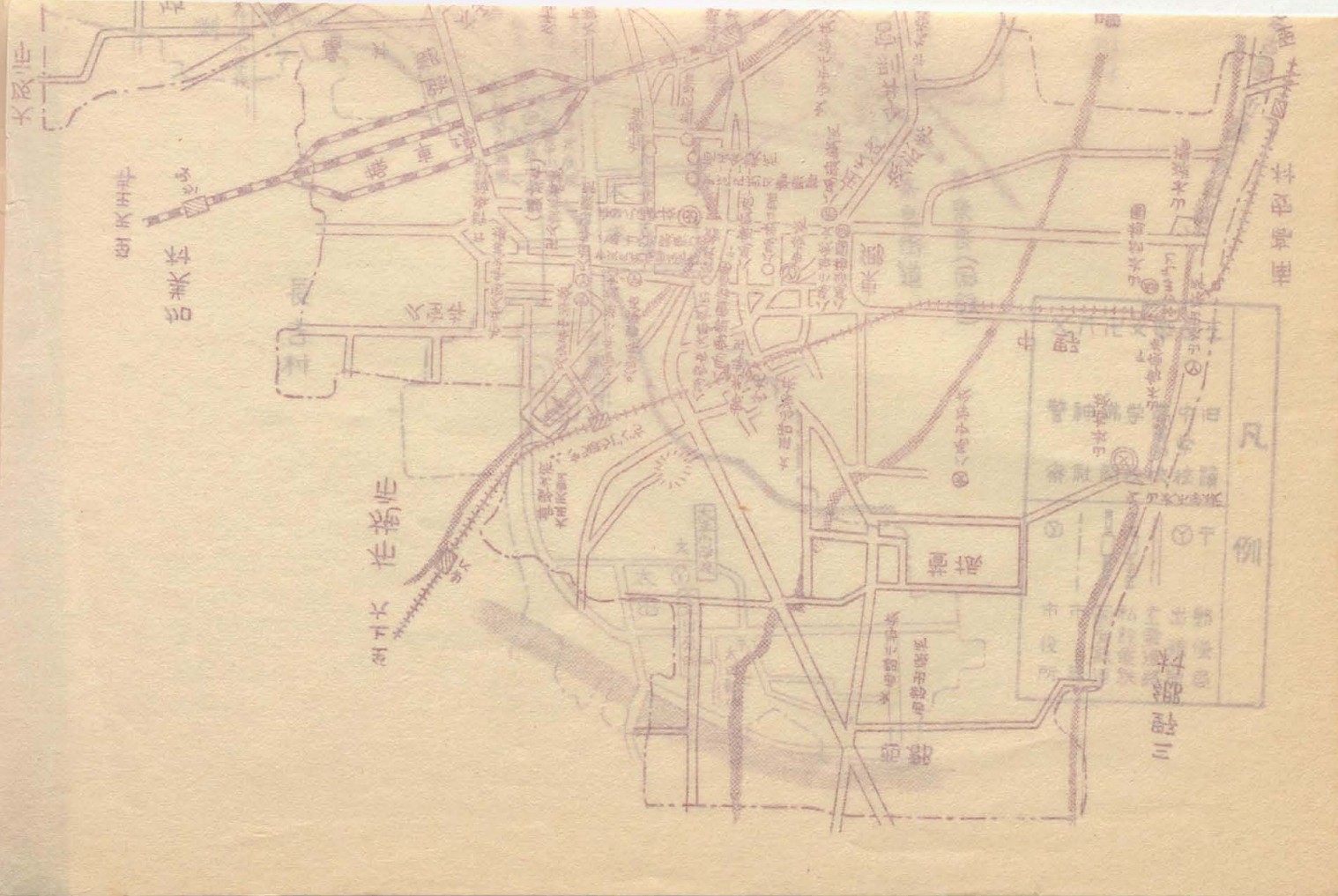


蹟古所名

各 祠 古 蹟

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

卷一



長安門

明長安門

台榭

明長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

凡例

凡例

凡例

凡例

凡例

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

長安門

観 光 案 内

① 大正天皇御野立所 (所在地・大字佐堂)

近鐵久賢寺驛北西方約1町餘布施市金岡に接する所方約10間周圍に樅樹があつて中に丈餘の紀念碑があり、碑面に大きく御野立所と刻まれている。これ即ち大正3年11月17日陸軍特別大演習の際大正天皇が行幸あらせられ約1時間に亘つて親しく御統監遊ばされた所である。現在は四圍に人家櫛比して御野立所の感は非常に薄くなつたが當時は人家としては一戸もなく見渡す限り大根畑であつた。又本碑こそは八尾市發展のよき紀念碑である。

② 顯 證 寺 (所在地・大字久賢寺)

當寺は眞宗本派の別院別格で一般に久賢寺御坊と呼ばれ、河州11郡の各末寺を統轄していた巨刹である。その前身は西證寺と稱し、蓮如第11男實順が住んでいた。處が實順若くして遷化し後嗣がなかつたので、享祿2年10月近江國大津三井寺の南別所近松の近松山顯證寺に在住していた蓮如第6男の蓮淳を寺號もろとも當地に移り住せしめた。當時は大坂石山本願寺の華かなりし時代で、當寺は石山の防禦に必要欠くべからざる地点で、古くから重要視された寺である。現在久賢寺は當時の寺内町として發展を遂げたもので、その基盤のような街並、街をとりまく濠(これは現存しない)我國寺内町の典型とすべきものである。

當寺も亦甚だ宏壯でその建坪總計965坪に及び後庭には有名な舍月軒という



大正天皇御野立所



茶室もあつたが荒廢大破してしまつた。現在の堂宇は寶永7年4月に再建されたものである。(写真は八尾御坊太鼓樓)

③ 大信寺 (所在地・大字八尾)

八尾別院又は八尾御坊と呼ばれた眞宗大谷派の別院である。開基は本願寺第12世教如で徳川家康の護持によつて慶長12年3月に建立された。當寺は甚だ宏壯で始めて當市にきた者を驚かすに足るものである。本堂は棟行17間梁行15間という巨大さで、その廣間書院庫裡太鼓樓等の大建物が聳え立つている。なお書院の棟24枚は圓山應舉の筆と傳えられているが惜しいことには破損が甚だしい。なお天明8年正月本山本堂炎上の際は當寺の本堂を解体京都に引移し本山假本堂となつたことがある。その後憲政11年12月還付せられ再び當地に聳え立つた。

④ お逮夜市

毎月11日と27日盛大な露天市が今なお行はれている。この起原については確たる史料を見ない。この露天市の行はれる場所が久寶寺御坊と八尾御坊との間約數町に亘つていること、その名稱がお逮夜市と言はれているところから察するとこの兩寺院に關係の深いものであることは否めない。お逮夜は忌日又は命日の前日であることは申すまでもない。

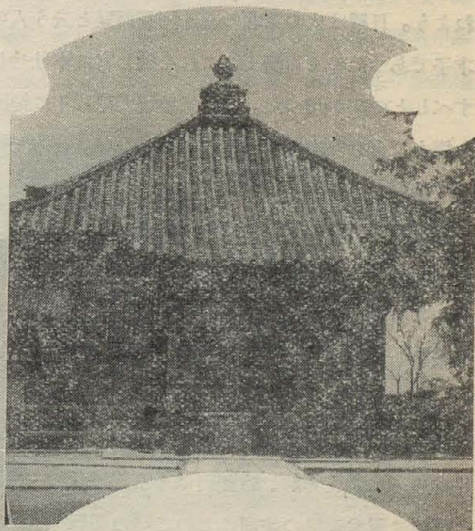
例月27日は親鸞上人のお逮夜に相當し、兩寺院は宗祖の法要を盛大に嚴修する。近郷の善男善女が踵を接して參詣し法話を聽聞する。人が群集する處商人又集り沿道に店を張る。かくてこの市は形成されたのであろう。かく考えるとこの市の起原たるや遠く織豊の時代であろう。初め久寶寺御坊が建立されてこの市が発芽しつつ八尾御坊の建立によつて愈々生長發展したのであろう。現在は交通上の關係によりこの市は次第に久寶寺を去つて八尾に移り昔日の觀はなくなつたが相變らず殷盛を極めてゐる。

⑤ 大聖將軍寺（所在地・大字太子堂）

草創は聖徳太子と伝えられ世俗に下の太子と呼んでいる。以下簡単なが古傳を探つて見よう。

聖徳太子が物部大連守屋を御討伐の時この地で両軍が大激戦を演じた守屋の軍勢は強盛であつたので、太子の軍は非常に苦戦に陥り危難は太子の御身に迫つた。丁度その時路傍に大きな椋の木があつたので、太子はこれに身を避けられ無事に難を免れられた。太子はこれを大變歡喜されて神妙椋樹悲母木我身出生廣大思紹隆佛法今成就日々影向不退轉と唱えられ、やがてこの地に伽藍を建立あつて神妙椋樹山大聖將軍寺と名づけられたと云う。

大信寺（八尾御坊）（下）と下の太子（右）



中世以後數度の兵亂に伽藍は荒廢し又明治21年の暴風に本堂は倒壞し全く舊觀を失つた。その後住持村民一般復興に精進し近時寺運や隆りしは喜ばしきことである。

本尊は如意輪觀音で室町初期の作と思

はれる。又太子16才の聖客とも奉安している當寺の境内には前記の一大老樹があり附近には守屋の首洗池、守屋の墳がある。

⑥ 日羅寺 (所在地・大字木ノ本)

樟本神社の境内に荒れ果てた一小堂宇がある。これが日羅寺で往年の名蹟を辛くもとめていた姿である。今しばらくその由緒を尋ねよう。日羅は火の葦北の國造阿利斯登と云う人の子で宣化天皇の御代にこの人親子が外交使節として百濟に遣された。日羅は賢明な才子であつたので百濟王はこれを受し官に奉仕せしめた。たまたま日本では任那政府の再建が目論まれ、半島事情に明るい日羅を召還すべしとの議が起つた。それで敏達天皇12年に紀國造押勝、吉備海部直羽島の二人を使節として日羅の召還を申入れた。百濟王は日羅を惜んで言を左右にし申入れに應じない。日本では重ねて羽島を遣はし今度は強硬に談判、百濟王はついに恩率、徳爾を日羅に随伴させて歸國を許した。

日羅等が備前の國兒島屯倉に到着すれば朝廷は大伴糠手子を遣はされて慰勞せられ阿斗桑市に館を造つて日羅をおき優遇された。この阿斗桑市は木ノ本の古名だと傳えられここに一字を建立して、薬師佛を安置したのがこの日羅寺だと云う。

その後朝廷では、しばしば使を馳せて日羅に策を問はれ彼は又悉さにその策を具申した。

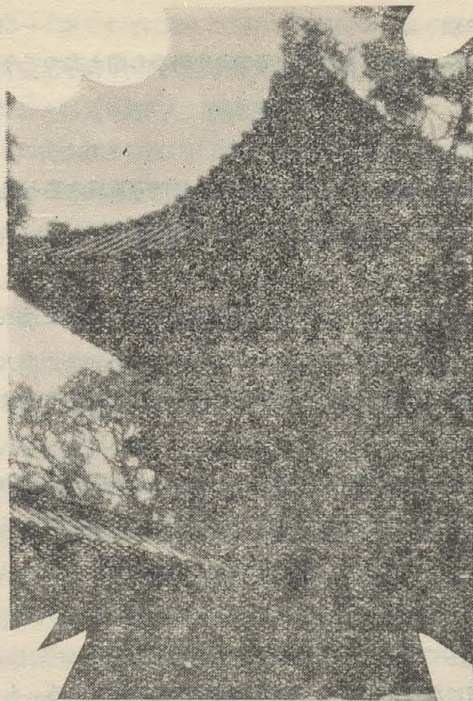
百濟より目付役として随伴した恩率、徳爾等は災の祖國に及ぶを恐れ歸途ひそかに謀つて日羅を暗殺した。

⑦ 常光寺 (所在地・大字西郷)

當寺は臨濟宗南禪寺派に屬する禪刹で、本尊が地藏菩薩である所から、寺名よりも入尾地藏と云う方が廣く知れ亙つている。日本三地藏の一に數えられ、古狂言にも入尾地藏の一作があり、可成古くから普く知られた名刹である。

草創は聖武天皇の依願によつて時の高僧行基が建立し新堂寺と稱した。その後、嵯峨天皇の弘仁年間に小野篁が、地藏の尊容を彫刻してそれを安置した。現在の本尊は即ちこれである。寛治二年に白河法皇本尊の靈驗を聞き召し、同年御參詣あつて人面舍利を奉納あらせられた。その後時代を経て南北朝の頃ともなれば、當寺前方の入尾城は絶えず政防軍守を重ね、ために當寺の堂塔は大破荒廢に歸依し莊田、梵鐘初日山及び常光寺の扁額を寄進した。これより舊號を改めて常光寺と稱することになつたと云う。

天正17年には豊臣秀吉が病氣平癒祈願のため米五石を寄進しているのも寺寶の寄進状によつて知られる。次いで慶長の役初まるや當寺は再び戦化の巷と化した。當寺は家康の顧問格であつた以心崇傳と關係の深い寺となつていたので、辛くも焼亡を免れ得たが殿堂は



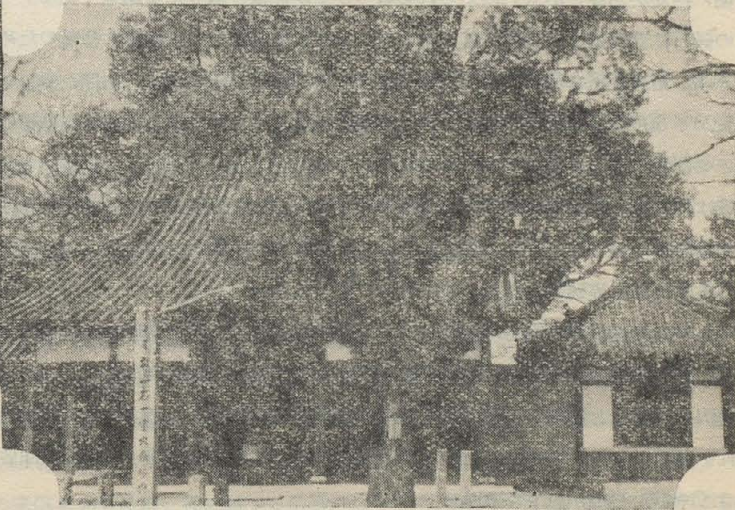
嘉慶2年在銘の鯛口等がある。なお當寺では例年4月24日に大施餓鬼會を嚴修し境内では地藏踊と稱する大盆踊が行はれ、河内の一名物となつている。

⑧ 龍華寺大門跡 (所在地・大字植松)

龍華寺は稱徳天皇が神護日京雲3年冬10月朔日に由義宮へ行幸せられ折肆廡を建てられて遊覽せられ、當寺へ鹽30石施入せられし事

再びひどく荒廢してしまつた。よつて慶安元年8月徳川將軍家光、この古刹維持の資として寺領17石2斗餘を寄進し、引續き歴代將軍より御朱印を賜つて明治に及んだ。

當時の境内には八尾別當顯幸の墓、藤堂家臣七十一士の墓、八尾寺内村開發者森本行哲居士の供養塔等がある。寺寶としては前記の佛舍利、義滿の扁額畠山三好氏一族の寄進狀制札、應永6年の常光寺縁起、永正6年の勸進帳



常光寺樓門(左)とその本堂(右)

が續記に見えている。これより察すると草創は奈良前記と思はれるが明らかでない。

其の後桓武天皇延暦19年に燈明料として、若江郡の田1町6反を賜施せられている。以後杳として龍華寺は史書から消え去つて今はたゞ大門と稱する地に大礎石が二基田の中に千古の名残を留めている。

⑨ 木村長門守重成之墓 (所在地・大字西郡)

墓は西郡北の辻北端若江村の東南と境を接する位置にある。碑石高さ3尺、台石高さ約2尺、周圍1丈2尺、長門守重成之墓と刻し南面している。碑石は角であるが、非常に缺けていて殆んど圓味を帯びている。この碑石の缺けらを所持していると勝負運が強いとか寢小便に特效があるとか云い傳えられ賽者のひそかに取り取りたる結果である。

この碑石は彦根藩士安藤長三郎次輝と云う人が、重成百五十回忌辰に菩提のため建てたもので、この長三部次輝の先祖安藤長三郎重勝こそは、當表合戦に於て重成の首級を擧げた人である。

慶長20年5月6日西軍の將木村重成は若江に陣を布き、京街道を南進する東軍の側面攻撃に出た。東軍は直ちに藤堂、井伊の兩隊を西進させ西郡、若江に激戦は展開した。

重成は最初藤堂隊を撃破し相當の損害を與えたが、つゞいて井伊隊の攻撃を受け終日轉戦の疲勞と衆寡敵せず、遂に重成は庵原助右衛門朝昌の槍にかゝりて落馬、前記安藤長三郎重勝すばやくその首をあげた。家康がこの首を實檢した時ともゆかしい伽羅の匂がしたので重成の用意周到を歎賞したのは名高い話である。

大正8年大阪縣がこの戰場に標石を建て「此附近木村重成奮戦之地」と題した。

⑩ 野史著者飯田忠彦先生舊棲の地 (所在地・大字八尾慈南町)

八尾沢の川通りと慈南町と交叉する東南角開成坊と云う寺がある。これより東方にかけて一帯が、飯田忠彦の舊邸の跡である。もはやこれを知る人も甚だ稀になつたので、昭和24年11月3日有志相謀つて、前記開成坊の北西角に、野史著者飯田忠彦先生舊棲之地と題するさゝやかな石標が建てられた。

飯田忠彦は野史291卷諸系譜80卷その他多數の著書を残した國史の研究者であつて、晩年は史料蒐集のため諸國を遊歴したが、その青壯の時代はこゝの二階に引籠つて刻苦精勵讀書に倦まなかつた。當時の彼を評して二階の先生と渾名したそうで、後年の大著述をなす心源は實にこゝで養はれたのである。忠彦は寛政10年12月18日周防の徳山で里見新十郎の二男として産れた。幼にして明敏伶俐

で13~4才ですでに織史に通じ、又武技をも兼て備えていた。

文政元年偶々河内に遊學したが、當時入尾の大庄屋で學問を好んで飯田忠右衛門忠直は彼の人爲を悦び迎えて嗣となし、その女に娶せた。これより前記の二階先生の生活が始つた。

その後安政6年江戸に赴き、天保5年華頂宮の指南役となり、ついで有栖川宮に奉仕、天保10年中宮寺宮の内客となり、去つて又有栖川宮の侍臣となり京都に住した。たまたま萬延元年櫻田門事件が勃發して、交友の關係から彼もその嫌疑をうけ、伏見奉行所に拘置され、殘酷な幕吏の取調べに憤慨し割腹して果てた。時に萬延元年5月27日年63才であつた。墓は京都市河原町通二條上ル龍源寺にある。

⑩ 切支丹墓碑 (所在地・大字西郡)

入尾市西郡共同墓地の、やゝ北西部に傍つて並立つ石碑の間に、一見舟底型ともいふべき一碑がある。この碑は高さ2尺、幅1尺4寸8分、厚さ約7寸、表は平面で大体圓味を帯びその先端がかすかに尖つている。その上部に大きな十字架、すぐ下に横書でIHS、その下に細かく横にMANTOとあり、その右側に天正10年壬午、左に5月25日と何れも二行に細字で刻んである。天正10年といえば織田信長が本能寺で非業の死を遂げた年で、いはゞ我國キリシタンの最盛期である。切支丹墓碑は他所にも相當發見されたが、大体は板碑型立石か蒲鉾型置石で、年代的に見ても元和、慶長期のものが多い。然るに本碑は前記の通り舟底型であり時代も一層古いで、學界ではこれを珍重し、重要美術品として指定した。

序に入尾の切支丹について述べよう。若江城主三好義繼の重臣に池田丹後守という人があつた。織田信長が天正元年11月に、若江城を陥れた後は信長の臣となり、若江、入尾兩城の守護の任にあつた。この人は永祿6年洗禮を受けてドン・シメオンと名のつた程の篤信者であつた。耶蘇會士通信に、ロレンソは飯盛場に赴き、三好長慶の家臣73人に受洗中主なる三人三箇伯耆殿、池田丹後殿、三木半太夫なり。となり切支丹大名記に、この頃他にもう一人信仰によつて征服された、有位の人物があつた。それは入尾の大名でいづれも三好長慶の家來すじに當る、池田丹後守である。彼の家臣も亦大多數、彼に倣つて信者になつたと見え又同書に、京都の教會堂は、大盛典のある時には、あらゆる地方、あらゆる階級の信者の集會所となつた。間もなく大集會をする習慣が、名ばかりの教會堂のある地方にも廣まつて行つた。例えば高槻、飯盛、入尾、若江、岡山というが如き地方がそうであつたとある。

これより察すれば當時入尾にはすでに大多數の信者がおり、名ばかりの教會堂とはいへ一堂を設けて盛に集會していた事が明らかで

ある。然らばその教會堂は何處にあつたか、若江では大白、クルスという小字名が残っているの、その位置は明らかであり當入尾では小字名ではないが、古くからバテレン屋敷と稱する約二百坪位の地域がある。場所は入尾市大字西郡の谷小路と云う通の真中程を一寸西へ入つた邊である。現在は人家が建つて昔日の面影は更にないが、明治初年頃までは周圍に家が建つても、この土地だけは藪笹が繁茂するにまかせ、人皆この土地に觸れるのを忌み嫌つたということである。又この地に次のような傳説が残っている。切支丹禁制の令厳しく教會堂も破毀せねばならなくなつた。せめてはと云うのでその鐘をこの地下深く埋没したが、不思議や夜が更けば、地下にて鐘がうらめしそうに鳴り響いたというのである。以上によつて大体その位置は推定し得ると思う。

⑩ 伴林光平翁彰忠碑 (所在地・大字成法寺)

入尾市成法寺に、現在は廢絶しているが、幕末の頃教恩寺と云ふ荒れ果てた寺があつた。光平翁の由縁の寺で天保の末頃翁が江戸から呼び歸された時、住むに家なく介する人があつて、この教恩寺の住職となつた。時に弘化二年の六月で翁は三十三才の働き盛りであつた。檀家としては僅かに十數戸、まことに貧しい生活ではあつたが、文久元年二月大和法隆寺の駒塚の草庵に去るまで實に十六年間この寺に住んだのである。翁は住職となつたものゝ佛事勤行は決して本意ではなく、國典を講じ和歌を教へ、荒陵の探査に最大の努力を捧げた。

現在この教恩寺の跡に立派な彰忠碑が建っている。碑面に「贈從四位伴林君光平碑・正二位勳一等伯爵田中光顯題」とあり裏面には、大西松蔭の撰文になる光平翁傳が刻んである。郷黨の有志相謀つて、翁の顯彰團體である伴林會を相續し、この會の手によつて大正三年十一月に建碑された。碑の右側に青年團成法寺支部として使用している、古い瓦葺の平家があつた。これは教恩寺の本堂を半分縮めて建てになほしたものだそうで、翁が慨然國事に盡すべく僧籍を脱して大和へ去らんとし、本是神州清潔民、認爲佛奴說同塵如今棄佛佛休、咎本是神州清潔民と本堂の壁に書さ残したのは實にこの建物なのであつた。惜しい事にはこの建物は昭和十二・三年頃に取毀され今は新しい青年會場が出来ている。

茲に序翁の略傳を述べておこう、翁は文化十年九月九日に南河内郡道明寺村大字林の愈光寺という寺の二男に生れた。六才の時母を失つて、同郡丹比村の西願寺に養はれ、十六才の春上京して、西本願寺の寮學に佛學を治めた。銳意研鑽の結果二十才で本山學寮の因明論講の教授となつた。その後國學に志し和歌の道を究めんと諸國に遊歴し、中村良臣、飯田秀雄、加納諸平等に學び、遂に天保十年二十七才の時、江戸に出でて國學の大家伴住友に師事した。西本願寺はこの事を聞いて、僧侶が國學を專攻することを非として兄を詰

つたので、翁は止むなく呼び歸され、八尾成法寺の教恩寺に入った。これより十六年間、ひたすら國典和歌を講じ、門下實に數百の多きに及んだ。就中皇陵の探查に意を用い、河内國陵墓圖、大和國陵墓檢考、巡歴記事等の著述を完成した。文久元年二月に大和法隆寺の駒塚に移り住み、中宮寺の宮に出仕し、侍講となつた。文久三年八月天中組の大和義擧起るや、直ちに馳せ參じてこれに参加し勇戦大いにつとめたが、時に利あらず、同年九月廿五日幕吏に捕はれ、元治元年二月十六日五十二才にして、京都六角の獄にて斬られた。著者は前記の外に難解機能重荷、河内國上古水土考、枯物語、三政一、致説、於母比傳草、垣内七草、歌道大意、野山のなげき、篠屋獨語等多數あるが、殊に南山踏雲録は著名である。

⑩ 環 山 樓 (所在地・大字八尾)

環山樓は八尾市八尾通稱産屋に古びた建物として残つて居たが、昭和二十四年八月八尾稅務署建築に際し、これをそのまま東方約一丁余に移轉した。現在は瀟灑な稅務署の前に以前と同じく古色蒼然と控えている。

同樓は八尾の豪族石田氏の設立した學舎で、その創立年代は明らかでないが享保十二年に京都の碩學伊藤東涯が、この所に招かれて書を講じた際に名づけられたものであつて、その誌す所の楼名の扁額並に還山樓記は、久寶寺、白木彌三氏に保存されている。

これによると還山樓の名は青山一脈、高安山より南に走り、二上、金剛の連峰が遙かにこの樓を還つて一望の裡に在り、勝景の亭館に近郷述道の人々相集つて、先人の遺書を繙き、古道を尋ね、相共に古今を慨し、尙道遺存するの感慨を深めた。その席上で東涯因んで以つて名づけたのである。

當時八代將軍徳川吉宗の實學の奨励と文教刷新の影響をうけて、中央は勿論、地方諸藩に於ても、夫々藩校の設立があり、亦地方庶民教化の施設は、その地富豪商家の好學の風潮の頓に高まると共に、その頃次第に高潮に達し道を求める者相集まつてこれを支持し、それ等好學の人によつて各地に郷學、私塾の創立せらるゝものあり、近くは享保二年創設の平野に於ける含翠堂あり、久寶寺には隣角堂があつて、この還山樓と共に夫々學者を招いて、講筵を開き以つて世人の教導に資したのである。

享保十二年京都堀川塾の碩學伊藤東涯が平野の含水堂に遊歴講説の砌、當地の石田利清その叔父利長、從弟可承飯田通古等この所に會して親しくその來講を求めて講席を開き以つてその師風を仰慕したのであつたが、この席に連つて親しくその講書をうけた人々にはなお利清の弟孝鳳、從弟利穹及び登口孤島等があり弱冠にして良くその説を學び郷民の教化に指導的な務を果したのである。

翌々十四年伊藤東涯はこれを偲びつつその求めに應じて深い感慨の裡にこの樓記を物して贈つたものである。

石田利清は當時二十一才であつて、字は嘉右衛門義萍と號して賢明智策の才であり、辯舌を能くしてその識才郷党一圓に名高く、従つて郷間の子弟等はその徳風學識を慕つて教を乞ひ私淑する者多く、且亦人爲り俠風があつて理非曲直を辯ずるのに嚴正私公であつたがために人をして再び復争うことなからしめた程であつた。

その名聲と共にこゝに學舎を設けてそれ等志學の人々に、或は知名の學者を招いて講席を設け、或は共に書を繙いて同行し郷里の鑿鏗となつた。

それ故寶曆十四年五月五十九才を以つて歿した時は、その葬送に當つて遠近の人々その余風を偲び會葬する者五百有余人近郷に稀なる一大盛儀であつたと云う。もつてその人格を偲び得るであろう。

墓は高安村郡川法藏寺の後山にあつたが、これも昭和二十四年墓地整理により唯今は法倉寸の山門に入つてすぐ右側に積み重ねられた無縁塔の中にある。

⑭ 樟本神社 (所在地・大字木ノ本)

延喜式「樟本神社三座」とあるが當社で木ノ本、南木ノ本、北木ノ本の三部落に各一座づつ鎮座祭神は布都明神で、物部守屋の靈とも傳えている。この地は物部氏の本居であつて守屋地とか摺城の趾等の傳説がある。

⑮ 澁川神社 (所在地・大字植松)

國鐵入尾驛裏の前に鎮座祭神は、天忍穗耳命と饒速日命で他に攝社が四つある式内の郷社で境内一千八百三十九坪老樹繁茂して莊嚴な神域である。

當社はもと舊大和川(現在長瀬川)の東北岸に鎮座していたのであるが、天文二年五月五日に大和川が氾濫し社殿が悉く流失した。それで氏子達は相議してこれを川の西南の高地即ち現在の地に遷し奉安した。舊若江、澁川の兩郡はこの川を境としていたので當社は延喜式には若江郡とあり、河内誌には澁川郡とあるのは前記の事情による。

⑯ 矢作神社 (所在地・大字別宮)

姓氏錄河内國未定雜姓の部に「矢作連、布都奴志乃命之後也」とあつて、當地は矢作部の本居で、その祖神經津主命を祀つたのが當社の起原であろう。式内社で明治六年郷社に列せられ一名掃部宮とも、別宮入幡とも呼ばれている石清水入幡宮に現存する永久四年九月の大政官牒に、石清水入幡宮の各國各地にあつた社領を明記しているが、その中に老處字掃部別宮、若江郡御供田伍町政段とある。

これによると當地にその所領があつたため、いつの頃よりか石清水の分靈を當地に勧請し、別宮としたことが推察出来、又掃部宮別宮八幡と稱する所以も知られる。

⑩ 許麻神社(所在地・大字久寶寺)

久寶寺の西南に鎮座する式内の古社で、祭神は許麻大神と云う。姓氏録河内國諸蕃に「大狛連出自高麗國人伊里斯沙禮斯也、又大狛連、出自高麗溢士福貴玉也」とあるこの伊里斯沙禮斯の後は、大縣郡巨麻郷に居住し、こゝにその祖神を祀つた。即ち堅上の奥大字本堂の大狛神社であり、福貴王の後が本居としたのが許麻莊即ち、久寶寺である。河内誌に「在久寶寺村、今稱天王有古筒、所謂色紙形者筒上題日、河州澁川郡許麻莊、神武、明星澤和歌日、許麻乃里澤邊爾生留杜若、君加手每乃、水也加血佐牟神武隄名、明星澤在村西北、生燕子花、首夏盛開」とあり、古來より燕子花の名所とされていたが、今はその面影も留めない。

なお当社々務所の邊は、久寶寺觀音院のあつた跡である。同院は古義眞言宗洛西御室御所眞光院の末寺で大悲閣と呼ばれ久寶寺の古蹟である。同院の記録に依れば、久寶寺は聖德太子の御建立で、同太子自作の十一面觀音を本尊とし推古天皇二年三月勅願所となつた。以來當國佛法の中心として榮えたが、遂に松永彌正久秀の兵火に罹り悉く烏有に歸した時の住持源山和尚は、本尊を背負い伊賀國下津に難を避けたが、永録九年五月病歿するに及んで本尊は又當地へ送り還された。當地では一字の堂もなかつたので里人の信施を以つて小堂を建立し、本尊を安置したのが久寶寺觀音院の創始だと云う。なお堂院の鐘樓にあつた梵鐘は、その響殻々十里内外に及ぶと云はれる名鐘で明治の初年の廢寺處分に行方不明となつたが、現在ソ聯モスコニーコライ堂に健在であるとのことである。當社の井戸屋形はこの鐘樓を修繕して記念したものである。

一、關於本會之宗旨及目的
 本會之宗旨在於研究我國經濟之發展，並促進我國經濟之繁榮。其目的在於：(一) 搜集經濟資料，(二) 研究經濟問題，(三) 宣傳經濟學說，(四) 訓練經濟人才，(五) 服務社會大眾。

二、關於本會之組織及成員
 本會之組織分為：(一) 理事會，(二) 監事會，(三) 會員大會。其成員包括：(一) 發起人，(二) 會員，(三) 贊助者。

三、關於本會之經費及收支
 本會之經費來源包括：(一) 會員會費，(二) 贊助費，(三) 義演收入，(四) 政府補助。其收支應由監事會負責審核，並定期向會員大會報告。

四、關於本會之活動及服務
 本會之活動包括：(一) 舉辦經濟講座，(二) 出版經濟刊物，(三) 舉辦經濟展覽，(四) 提供經濟諮詢服務。

五、關於本會之附屬機構
 本會得視需要設立附屬機構，如：(一) 經濟研究中心，(二) 經濟圖書館，(三) 經濟服務中心。

六、關於本會之修改章程
 本會章程之修改，應由理事會提出，經會員大會三分之二以上多數通過。

七、關於本會之解散及清算
 本會因故解散時，應由理事會提出清算報告，經會員大會通過後，將剩餘財產撥充公益事業。

商 工 案 內